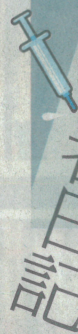


H27. 1. 10

「つどい場さくらちゃん」の年末年始

Dr.

和の町医者日記



「生と死」シリーズ③

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。今年もよろしくお願ひ申し上げます。年末からインフルエンザが猛威をふるっています。ワクチン接種を受けていても感染することがあるので、けして油断しないでください。

職場内感染、家族内感染も多く見られるので、手洗いとマスク着用を励行してください。もしインフルと診断されたら、最低5日間は自宅で安静にして、けして人にうつさないように心配りを願ひます。インフルの特効薬として飲み薬、吸い薬、点滴がありますから、医師とよく相談してください。

さて、年末年始はインフルでの往診と看取りで大忙しでした。その合間を縫って、認知症の方とその家族を支援する西宮市のNPO法人「つどい場さくらちゃん」に連日立

ち寄りました。「要介護5」の99歳、有岡富子さんがここで年越しをするとのこと。僕は富ちゃんの主治医としてついでに、彼女こそ僕の認知症の「お師匠さん」なのです。



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。

富ちゃん、99歳の穏やかな旅立ち

富ちゃんは徐々に食欲が低下し衰弱していたなか、昨年秋に「さくらちゃん」ご一行さまと2泊3日の沖縄旅行を果たしました。

無事に年越しはできたものの、元日の夜に自宅トイレで一時、意識不明になりました。しかし、2日間ほど見事に持ち直しました。そして3日の夜、みんなが夕食を食べ

ている途中に富ちゃんは静かに旅立たれました。7日に多くのの人に見守られるなか、「千の風」になりました。

99歳、要介護5の富ちゃんでも、オムツが必要だったのは1日だけ。そして寝たきりになったのも1日だけ。そして、亡くなる直前まで、なんとすき焼きを食べてビールを少し飲んでいたので、あまりに自然で穏やかな最期で、完璧な老衰です。苦しみや痛

みとは一切無縁でした。死亡診断書には、「死亡の場所」という欄があります。1が「病院」で、2が「施設」、6が「自宅」です。さくらちゃんは、7の「その他」に丸をすることにしました。実は、僕はこの7番が結構好きです。兄弟の家、子供の家、愛人の家、ウイークリマンション…これらは自宅

つどい場さくらちゃん 認知症の方とその家族を支援する西宮市のNPO法人。おでかけ隊、見まもり隊、学び隊などの活動を行っている。介護者が自由に語り合う「つどい場」の賛同者が増え、全国各地に「つどい場」が開設されるようになってきた。

なつてからは1度も誤嚥性肺炎を起しませんでした。そして亡くなる2日前までトイレで排泄していました。

こうしたい思いをつづつた本が昨年末に出ました。「家族よ、ボケと闘うな」(近藤誠氏との共著、ブックマン社)。これは、昨年発売され大好評をいただいている「ばあちゃん、介護施設を間違えたらもつとボケるぞ!」(丸尾多重子さんと共著)の第2弾になります。これらの本を僕に書かせてくれたのは、他ならない富ちゃんです。

富ちゃんには僕にいろんなことを教えてくれました。認知症の薬を飲んだら暴れたけど、やめるとすぐに正気に戻ったこと。週4回のデイサービスをやめた途端に元気になること。食事介助を止めたこと。手づかみで食べられたこと。手づかみだと誤嚥しないこと。だから、僕が主治医に

つどい場